グループにおける情動の変化に関する実証的研究

An Empirical Study On Emotional Changes In Groups

野　村　達　也

Tatsuya NOMURA

要　約

本研究は、D-group 体験を通じて起こる情動的変化を、Wilfred Bion のグループ理論に基づいて分析した実証的研究である。

この概念に基づき、グループにおける基底的想定と情緒的衝動の関係を検討するために５つの仮説を立て、研究を行った。仮説については次の通りである。①グループは不安が増すほど、基底的想定に支配される。②グループは不安が解消されるほど、基底的想定から解放される。③グループは不安が増すほど、インタラクションが高まる。④グループは不安が解消されるほど、インタラクションが少なくなる。⑤日本人グループにおいて、最も支配的になる基底的想定は、依存基底的想定である。

これらの仮説を検証するために、様々な側面から D-group の情動に関する測定をし、分析を行った。

結論としては、基底的想定は情緒的な特性を持った精神活動であり、グループにおける情動の変化が基底的想定の支配と密接に関係があるということの証明に近づくことが出来たといえる。

Ⅰ．問　題

本研究は Bion のグループ理論に基づいて精神分析指向の T-group（D-group）体験を通じて起こる、情動的変化を研究したものである。Wilfred Bion は Tavistock clinic でのグループ経験をもとに、グループにおける個々の活動と、グループ行動研究に多大な影響を及ぼした精神分析家であり、ある独特なグループ理論を発展させた人物である。ではまず、このグループ理論の中で本論文に必要となる基本的な概念、及び D-group について述べることから始めたい。

１．Bion のグループ理論

Bion によると、グループが１つの課せられた仕事をやり通そうとする

時に、2つの方向が生じるという。1つは共同でその仕事に取り組む方向（作動グループ）であり、もう1つは、同じ感情を共有することにより仕事を妨げる方向（基底的想定グループ）である。このような2種類の現象は、常時グループ内に存在しており、そのどちらかが支配的なっている。これらの説明は以下の通りである。

a）作動グループ(work group)

作動グループとして機能しているグループは、グループのメンバーが基本的な作業によって結ばれ、それに沿って行動する。そしてこのグループ参加のためには、「幾年にも及ぶ修練があり、経験を積むことで、精神的発達を可能にする能力をもった人のみ可能である」。また、その作業に向けられたグループの活動は、現実との関連を持ち、作業遂行のために合理的かつ科学的な方法を用いる。そのため、活動の現実的側面としての「時間」と「発達」は常に重視されている。つまり、グループのメンバーは自分や他人の個性を認識し、作業を成し遂げる責任感と、高い達成感を求めて行動するといえる。

また、作動グループとは、現実との接触、欲求不満に対する耐性、感情のコントロールなどを内包する心的状態である。そのため、新しい理念が進展していくのを可能にするのである。しかし、その行動はある他の精神活動によって時に妨げられ、時に推進される。Bion はこの邪魔をする行動を、基底的想定と名付けた。

b）基底的想定グループ(basic assumption group)

基底的想定とは、作動グループに不可欠なグループの様々な要素に伴う恐れや不安といった苦痛を、同じように強力な情緒的衝動の特性を持った、ある他の精神活動によって阻止され、回避される活動のことである。このような活動が支配的なグループの状態を Bion は基底的想定グループと名

付けた。また、基底的想定に支配されているグループの情動状態は即時的不可避的で、しかも本能的である。この活動に関与している個人個人は、自動的に否応なしにそうしているのであり、そのための特別な訓練や情緒的な経験あるいは心的成熟を何ら必要としない。この活動では発達も衰退もなく、時間の概念もない。基底的想定は、幻想的であるが、そのメンバーにとっては、現実的で合理的であるという認識がある。

さらにBionは彼自身のグループ経験に基づいて、3つの異なった基底的想定を述べた。それは「依存基底的想定」、「闘争/逃避基底的想定」、「つがい基底的想定」である。一時期に1つの基底的想定だけが支配的であり、同時に2つの基底的想定が支配的になることはない。またグループは最初の基底的想定とは異なった、他の基底的想定に変わることができる。

それぞれの基底的想定の行動内容を詳細に説明することは、この研究の範囲をはるかに超えているので、以下にはそれぞれの基底的想定の行動的、及び心理的な短い説明を紹介する。

①依存基底的想定(basic assumption of dependency)

このグループの行動はそこにいるメンバー達がグループの作業に対して、自分は未成熟で助けを必要とする無力な存在、故に自身だけでは何もできない「かの様に」振る舞う。つまり、グループは「未成熟有機体」であるといえる。一方、このグループにおけるリーダーは、全知全能としてグループの「貪欲で絶え間ない」要求に応えることができ、さらにすべての問題を解決できるとみなされている。グループのこの貪欲な要求が満たされないとき、またリーダーがその期待に応えることができないとき、そのリーダーは否認され、グループを任せるための新しいリーダーを探すという反応に出る。グループのリーダーは一人のメンバー、あるいはトレーナーであるかもしれないし、あるいはグループによって記録された歴史（聖書）のようなもであるかもしれない。例えばリーダーが、依存できるというグ

ループの欲求に沿わないと判断されれば、グループはこの聖書に訴えリーダーに圧力をかけるためにこれを利用するだろう。

②闘争/逃避基底的想定(basic assumption of fight/flight)

Bion は闘争と逃避を別々には考えなかった。2つの局面は、共通の感情の目的を持っていると考えたからである。このグループは一体性を保つために、内部か外部にライバルか敵をつくる。そして、それに対してグループはいかにもまとまっているかのような印象を与える。そのグループのエネルギーはそれらの敵と戦うか、逃げるために使われる。このグループで選ばれるリーダーとは、漠然と感じられる（幻想的な）外部、あるいは内部の敵と戦うか、もしくはその敵から逃げるようグループを動員し、指示を与える能力を持つことのできる人物である。もし、その敵が明確になっていないときには、リーダーに圧力がかかり、リーダーは良いリーダーと評価されるために、不当に敵を見つけたり、作り出したりする。また、このグループでは個人よりもグループという単位を重視する。

③つがい基底的想定(basic assumption of pairing)

このグループは、そのメンバーの中の2人（つがい）に注目する。誤解を避けるために述べておくが、つがい基底的想定グループにとって重要なのは、「つがい」そのものではなく、そのつがいによってもたらされる幻想である。このグループの存続はこれから生まれようとする何か(救世主)に対する希望、期待にかかっている。救世主とは、人間、あるいは一つの提案や計画、あるいはユートピア等である。つまりグループの抱えている問題や必要とするものがたとえどんなものであれ、将来起こる何かが、あるいはこれから生まれる誰かがそれを解決してくれるという集合的な無意識的信仰である。グループの行動はそのカップルの周りを中心とし、そしてその救世主待望は、そのつがいに託される。しかし、グループにとって

は救世主待望自体が目的であって、この目的は決して満たされてはならない。なぜならこの希望が満たされるということは、もはやそこに希望がないということを意味するからである。また、このつがい基底的想定は、他の基底的想定とは違って、グループの雰囲気は、希望に満ちた期待、楽観、親密、幸福感、そして穏やかで心地よい感じのよって特徴づけられる。

2.D-group

a)定義

D-group（Diagnostic group）とは、フランス学派（CEFFRAP）によって用いられる短期的な精神分析指向のT-groupである（Hafsi, 1990)。その他のT-groupとの相違点は、D-groupでは「二次的過程」だけでなく「一時的過程」をも取り扱われ、解釈の意味からグループ内の力動と、グループの「今・ここ」(here-and-now）における隠れた意味をも同時に把握することを認める点にある（Anzieu, 1984)。

b)構造

D-groupでは、一般的に、3～15日間に、90分のセッションが5～20回行われる。グループ構成は（原則として互いに見知らぬ）7～16人のメンバー、1人のトレーナー、および場合によってコ・トレーナー、2人の観察者からなる。メンバーとして適するのは、集団心理学とその方法について知識を得たいと願うすべての人である。通常の精神分析を行う場合よりも広い部屋と、参加者の人数分の椅子が用意され、椅子は円形に並べられる。観察者は、各セッションにおけるグループ過程を明確にするための記録を行う。

c)目的とルール

・目的

D-groupの目的は、集団心理学に対する、特に経験的な知識を提供することによって、心理的現象に対する参加者の鋭敏化を目指すことある。参加者は単に心理的現象を知るのではなく、対象としてのグループを体験し、それについて考え、理解していく過程を経ることによって、心理的現象を理解するための技術の一つを身に付けることができる。従って、参加者は伝統的な教育法のように一方的に教えられるのではなく、自ら集団現象を発見するよう導かれる。

・ルール

D-groupのルールには通常の精神分析における主な基本的原則が適用されるが、グループという条件に適合するよう多少修正が加えられたもので「表現の自由原則」、「禁制原則」、および「返還原則」、そしてこれらすべての原則を保証し、かつ個人のプライバシーを守るための「守秘義務の原則」である(Anzieu, 1971)。

表現の自由原則とは、参加者がそれぞれ自身を自由に表現し、また他の参加者のそれに注意を傾けるということであり、禁制原則とは、セッション以外のあらゆる状況下において、必要とされる形式的、かつ社会的な関係（例えば教諭ー学生関係）を除く、すべての個人的な活動や関係を制限するものである。返還原則はそれに通じるもので、もし参加者がセッション以外の状況下において、セッション中の出来事について、あるいはグループに関するその他のあらゆる事柄について触れた場合には、次回のセッションにおいてその内容を報告する義務を負うというものである。これは欠席者についても同様であり、欠席者は次回のセッションにおいて欠席理由を報告しなければならない。つまりグループに関するあらゆる事柄はグループの所有であり、それをグループの外に持ち出すことは原則として禁じられる（禁制原則)。そして、もしそれを犯した場合には、必ずグルー

プへその所有物を返還しなければならない（返還原則）という前提が存在する。

これらのルールがまず最初にトレーナーから参加者へ伝えられ、全員がそれを確認した上で第1セッションが開始される。

3.本研究の目的

グループにおける基底的想定と情緒的衝動の関係を検討するために、これまで述べてきたBionの理論から、次のような考えを導きだし仮説を立てた。

グループにおいて基底的想定が支配的な場合、それは、恐れや不安に対する防御的な行動である。つまり、不安の度合いによって基底的想定に支配される度合いも変化していくと考えられる。また、基底的想定とは、情緒的衝動の特性を持った活動であるため、不安の度合いによって情緒的な面も変化すると考えられる。そこで、本研究では、情緒的な面に、「好き」、「嫌い」という感情のインタラクションを当てはめて検証していくことにする。それと同時に、グループにおける基底的想定の変化を見ていく中で従来から言われつづけている「日本人は依存的である」という面も、考えていきたい。仮説については次の通りである。

仮説1：グループは不安が増すほど、基底的想定に支配される。

仮説2：グループは不安が解消されるほど、基底的想定から解放される。

仮説3：グループは不安が増すほど、インタラクションが高まる。

仮説4：グループは不安が解消されるほど、インタラクションが少なくなる。

仮説５：日本人グループにおいて、最も支配的になる基底的想定は、依存基底的想定である。

これらの仮説を検証するために以下の研究を行った。

Ⅱ．研　　究

１.方　法

a)対象及び実施期間

実験の参加者として、奈良大学学部学生（当時１回生）137名を選出した。また、セッションは心理学実験に関する講義の一環として行われた。尚講義の性質上、受講人数を制限する必要があったため、受講生は全て、自ら受講を希望し、更に成績、志望動機等により選考され、受講資格を得た学生である。

セッションは、平成12年９月28日から平成13年１月18日にかけて実施された。

b)グループ構成

参加者は、男女の区別なく、学籍番号順に22～24名ずつ振り分けられ、６つのグループ（グループ１～グループ６）が構成された。

セッションは、原則として週１回、連続した２コマの講義時間（90分間×２）が使用された。１コマを１セッションとし、休憩を挟んで１回に計２セッションが行われた。１グループにつき４セッション、延べ24セッションが実施された。

１セッションにかけられる時間はすべて統一されるべきであるが、開始前に行われるD-groupのルールと目的についての説明、形式的な質問の処理、そして終了後のディブリーフィング等をすべて講義時間内に行う必要があったため、それを統一することが不可能となり、結果的には１セッ

ション60～85分間となった。

講義の成績評価に関しては、D-group の基本的なルール（自由参加、自由表現）が影響を受けることないよう、参加者全員に等しく単位が与えられ、開始前にその内容は参加者に伝えられた。

c)セッション室のデザイン

セッションは、奈良大学社会学部研究棟内の大実習室（窓がなく防音設備の整った）において実施された。

セッション室のデザインは、部屋の中央に、円を囲むような形で椅子23～25脚（メンバー用22～24脚、トレーナー用１脚)、その外側に観察者用の椅子２脚が設置された。メンバー用の椅子の背もたれに、それぞれの学籍番号、およびＡ～Ｘのアルファベットを表示する用紙が張られ、椅子の上にそのアルファベットが記された名札が置かれた。

室内の様子は、天井に設置されたビデオカメラとマイクによって記録された。

参加者（メンバー）への指示は、すべてトレーナーによって行われた。

d)目的とルールの説明

第１セッション開始前に、トレーナーからメンバーに対して、前述した D-group の目的と意味についての説明が行われた。実際のトレーナーの発言に基づき、以下にその内容を具体的に示す。

・目的

D-group の目的は、グループにおいて現れるダイナミクスや心理的現象を体験することであり、グループに与えられる基本的作業は、グループとして自由に目標を定め、その発達に向かって機能、発達することである。グループ内におけるトレーナーの役割は、グループについて何か分かった時にそれを報告することである。

・ルール

グループのルールは、まず第一に、グループはセッションの中で、グループとして何を言っても（言わなくても）何を行っても（行わなくても）良い（表現の自由原則）。そして、それを保証するために、グループの参加者には等しく単位が与えられる。第二に、グループセッションは一時的な体験であり、セッション室やグループの在り方、またトレーナーやメンバー同士の関係等は、すべてセッション中だけの特別なものである（禁制原則）。従って、この場で言われたり行われたりしたことはすべてセッションの所有であり、その終了と共に死んでしまうと考え、他の場に持ち込むものではない（守秘義務の原則）。そして、もし参加者が、この場で起きた出来事、あるいはグループに関するあらゆる事柄、つまりセッションの所有物についてそれ以外の場で触れた場合には、次のセッションの中でそれを報告し、セッションの中に戻すという義務を負う。そのルールはまた欠席者についても同様であり、セッションを欠席した場合には、次のセッションの中で欠席理由を報告しなければならない（返還原則）。

また、メンバー全員の名前を憶えるより簡単であるという理由から、グループの中ではそれぞれのアルファベットが名前の代わりになる、ということが伝えられた。

トレーナーから自己紹介の提案があるが、それをやるかやらないかの決定、順番決め等はグループが自由に行うことであるという内容が合わせて伝えられた。そして、最後にメンバーからの質問を受け付け、全員が以上のルールを確認した上で、セッションの開始が告げられる。

e)セッションの流れ

参加者は指定された日時にセッション室に集合し、それぞれの学籍番号が表示された席に着き、名札を付けてトレーナーの入室を待つ。トレーナーの席位置は特定のメンバーへの影響を避けるために移動されたが、メン

バーの席位置は、自発的に席替えを行う場合を除いて、常に席番号順、つまり名札のアルファベット順で行われた。トレーナーと観察者が入室、着席し、グループのルールは変わらないということを確認し、質問を受け付けた上で、トレーナーからセッションの開始が告げられる。

f)ディブリーフィング

第4セッション終了後に、トレーナーはすべてのメンバーから感想を聞いたり、また質問に答えたりするための時間を設けた。そしてD-groupという特殊な環境はこの場限りで終了するということを再度述べ、メンバーの緊張を解いた。これは精神分析用語で「喪の作業（mourning)」と呼ばれるものであり、面接の影響が外部におよぶことを防ぐために行われる。

また6つのグループはローテーション方式でセッションに参加するので、セッションの内容等について、これから参加する学生に知らせないよう伝えられた。

g)質問紙

本研究では、各セッション終了時に質問紙に記入してもらい、それをもとに分析するという方法を用いた。

質問は全部で50項目あり、5段階尺度で記入させた。質問紙の事項は、基底的想定を測定するために、闘争の側面、逃避の側面、つがいの側面、依存の側面を、不安の度合いを測定するために不安の側面がランダムに書かれていた。

また、誰を好意的に思い、誰を非好意的に思ったのかということについても、記入するようになっていた。これについては、複数選択可とした。

2.結　果

まず、仮説1と仮説2についての測定結果から見ていきたい。前にも述べたが本研究の第一仮説と第二仮説は、1)「グループは不安が増すほど、基底的想定に支配される。」2)「グループは不安が解消するほど、基底的想定から解放される。」というものであった。

質問紙では、「基底的想定項目の尺度の結果から見た各セッション毎の変化」と「不安項目の尺度の結果から見た各セッション毎の変化」が測定できるようになっている。質問紙は、それぞれの項目について自分がそのように思うのか、それとも思わないのかということを5段階評定で選ぶというものである。基底的想定と不安の数値は、1が最も高く、5が最も低い値とする。では次に、それぞれの分析結果を見ていこうと思う。

まず最初に、この質問紙の信頼性を調べるためにCrombach alphaを求めた。その結果、α=0.84であったので、この質問紙の妥当性が確認された。

次に、基底的想定がセッションを重ねる毎にどのように変化していき、セッション毎に有意な差があるかどうか検証するために、反復測定による一元配置の分散分析を行った。その結果はTable1に示されている通りである。

闘争の側面は減少傾向が見られ、各セッション間に有意な差があった〔$F(3,15)=3.38$；$p<.05$〕。また、つがいの側面でも、減少傾向が見られ、各セッション間に有意差が見られた〔$F(3,15)=3.83$；$p<.05$〕。

不安についてもセッションを重ねる毎にどのように変化していき、セッション毎に有意な差があるかどうか検証するために、反復測定による一元配置の分散分析を行った。その結果はTable2に示されている通りであり、同じく減少傾向が見られ、各セッション間に有意差が見られた〔$F(3,15)=5.44$；$p<.05$〕。

また、基底的想定と不安の項目の相関を見たところ、有意な相関係数を得ることが出来た。そこで、高不安群と低不安群に分け、基底的想定にお

Table 1 各セッションにおける「基底的想定」の変化

	Session 1	Session 2	Session 3	Session 4
Fight	4.05*	3.68*	4.01*	4.06*
	(.74)	(.84)	(.66)	(.65)
Flight	3.32	3.30	3.34	3.32
	(.68)	(.65)	(.60)	(.65)
Pairing	2.98*	3.04*	3.25*	3.23*
	(.68)	(.69)	(.76)	(.79)
Dependency	2.64	2.90	3.04	3.04
	(.74)	(.81)	(.84)	(.81)

Note: 数値は平均と標準偏差を表す
* $p < .05$

Table 2 各セッションにおける「不安」の変化

	Session 1	Session 2	Session 3	Session 4
不　安	2.49*	2.60*	2.91*	3.08*
	(.90)	(1.02)	(1.07)	(1.10)

Note: 数値は平均と標準偏差を表す
* $p < .05$

いて有意な差があるか調べるために、*t*-検定を行った。結果は Table3に示されているように、有意差は得られなかったが、平均を見てみると高不安群の方が低不安群より基底的想定が高いことが分かる。

Table 3　不安レベルによる基底的想定の違い

不安レベル	基底的想定
不安の高い人	3.28(.35)
不安の低い人	3.38(.39)

Note:　数値は平均と標準偏差を表す

次に仮説3と仮説4の測定結果を見ていきたい。仮説3と仮説4は、3)「グループは不安が増すほど、インタラクションが高まる」4)「グループは不安が解消されるほど、インタラクションが少なくなる」というものであった。インタラクションについては、質問紙における、誰に好意的、非好意的な感情を抱いたのか、各メンバーが選んだ人の数をインタラクションの数値として測定を行った。不安については上述したものと同じである。結果はTable4の通りであり、インタラクションも全体的に見て減少傾向にある。

Table 4　各セッションにおけるインタラクションの数と不安の変化

	Session 1	Session 2	Session 3	Session 4
like	17.5 (10.8)	16.3 (16.4)	13.3 (8.9)	10.5 (8.4)
dislike	15.8 (25.3)	16.5 (18.2)	15.2 (13.6)	11.2 (11.4)
total	33.3 (29.5)	32.8 (34.1)	28.5 (16.5)	21.7 (18.7)
不安	2.49* (.90)	2.60* (1.02)	2.91* (1.07)	3.08* (1.10)

Note:　数値は平均と標準偏差を表す

仮説５の「日本人グループにおいて、最も支配的になる基底的想定は、依存基底的想定である」については、Figure1の通りである。これを見ると、依存基底的想定が他の基底的想定よりも強く出ていることが分かる。

結果については以上である。これにより、本研究の仮説を証明するための足掛かりを得ることが出来たといえる。

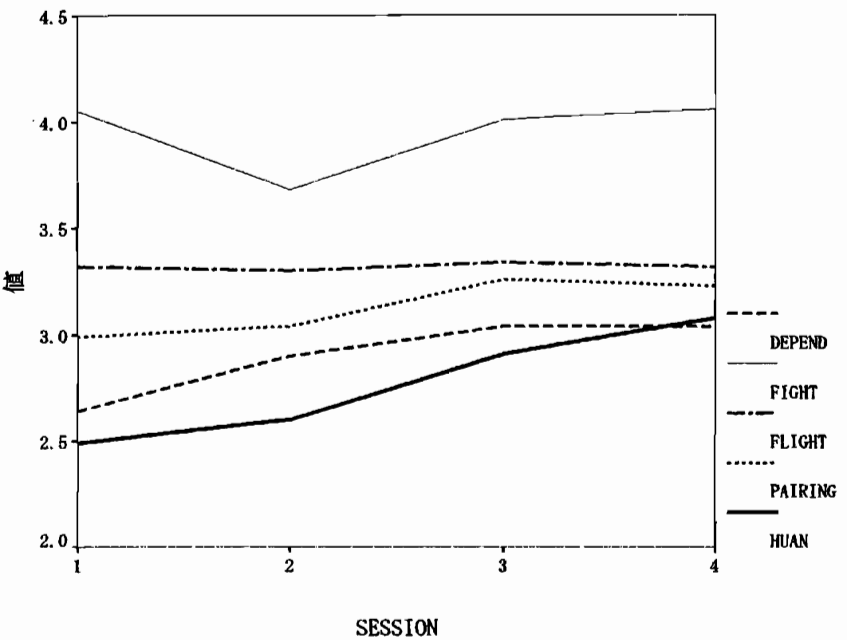

Figure1　基底的想定と不安の変化

3.考　察

本研究において、Bion によるグループ理論(作動グループ、基底的想定)を再検討し、それを明確化してきた。まず、今回使われる理論の概念を説明し、そのつながりを考え、それらを含めて仮説を立てていった。そして、グループ内での基底的想定と不安の関わりについて検討していった。

前にも述べたように、本研究の第一の仮説は、「グループは不安が増すほどに、基底的想定に支配される」であり、第二仮説は「グループは不安が解消するほど、基底的想定から解放される」、第三仮説は「グループは不安が増すほど、インタラクションが高まる」、第四仮説は「グループは不安が解消されるほど、インタラクションが少なくなる」、そして第五仮説は「日本人グループにおいて、最も支配的になる基底的想定は、依存基底的想定である」というものであった。では、このことを踏まえながら本研究について検証していくことにする。

まず、仮説1を分析した結果から見ていくと、各セッション間において、統計的に有意差が得られたのは闘争、つがい、不安であったが、不安が増すというセッションがなかったために、この仮説は証明できなかった。しかし、基底的想定と不安の間に相関が見られ、Table3示した通り、高不安群の方が低不安群よりも基底的想定において高い数値を示していることから、不安が高いほど、基底的想定に支配されやすいとうことが考えられる。

仮説2については、結果からいうと証明されたといえる。各セッション間での有意差が得られたのは闘争、つがい、不安であり、Figure1を見ると闘争ではセッション1とセッション2の間で、つがいではセッション3とセッション4の間で多少増加しているが、全体的傾向を見てみると、すべて減少傾向にあるといえる。つまり、不安の解消と共に基底的想定である闘争、つがいからも解放されているということになる。

仮説3も仮説1と同様に、不安が増すというセッションがなかったため

に証明されなかった。

仮説4については、Table4を見ても分かるように、不安の減少と共にインタラクションも減少していることが分かる。しかし各セッション間におけるインタラクションの数に有意差が得られなかったために、仮説を証明できたとは言えないことが残念である。

仮説5は、Figure1の通り、基底的想定の中では依存基底的想定がすべてのセッションにおいて、最も支配的になっていることが分かるが、この仮説の証明にはいくつかの疑問が残るため、完全に証明できたとは言い難い。では次に、その疑問と証明されなかったいくつかの仮説について論じていきたい。

仮説1と仮説3が証明されなかった理由としては、本研究がD-groupを使用したものであり、グループはセッションを重ねる度にメンバーとの連帯感および親密さが高まってったためであると考えられる。また、逃避と依存について、各セッション間での有意差が得られなかった理由としては、質問紙による分析を行ったために、メンバーの主観的な側面しか見ることが出来なかったという点にあると思われる。またD-groupの性質上、「何をやっていいか分からない」という状況であったために、どうしても「誰かに」、「何かに」依存的になってしまうのも理由の一つであるといえる。仮説5については、上述してようなD-groupの性質上の問題の他に、日本以外の国と比較するためのデータがなかったという点がある。

最後に解決策として次のような点を挙げておきたい。まず「不安」についてであるが、途中に不安を高める要素、設定を加えることで基底的想定がどう変化するのか探っていきたい。測定法については、グループメンバーの主観的な側面だけでなく、観察者による観察記録、グループメンバーの言動の採点なども合わせて行うことで、グループ外部からの客観的な目というのも入れて分析していきたい。

以上のように、証明されなかった仮説もあるが、グループの情動と基底

的想定は密接な関係にあり、基底的想定が情緒的衝動の特性を持った精神活動であるということの証明に近づくことが出来たと考えられる。また、グループにおける情動変化を見ていく上で得られたいくつもの重要なデータは、今後の更なる研究にも役立てていけるだろう。

〈付記〉
本研究論文を作成するにあたり、貴重な御示唆と御指導を賜りました奈良大学社会学部 Mohamed Hafsi 助教授に、心より感謝申し上げます。

参考文献

Bion, W. R.,1961. *Experience in groups and other papers.* New York: Basic Books.: (池田数好／訳(1973)「集団精神療法の基礎」岩崎学術出版社)

Bion, W. R.,1961. *Experience in groups.*: (対馬忠／訳著(1973)「グループ・アプローチ」サイマル出版会)

高橋哲朗／訳(1982)「ビオン入門」岩崎学術出版社

Hafsi, M., 1999. Beyond Group Inhibition and Irrationality: Bion's Contribution to the Understanding of the Group: 奈良大学大学院研究年報第4号 67-108.

黒崎優美(1998)「D-グループ(Diagnostic Group)におけるグループ過程の測定法の開発、検証、および応用」奈良大学修士論文

岡村二郎／編訳(1984)「小集団活動と人格変容」北大路書房